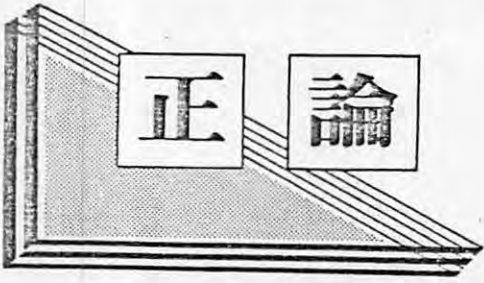


気になる最近の中国の兆候

九月初旬に北京で開かれた第三回日中間協議は、きわめて友好的な雰囲気終始したと伝えられ、来る十一月下旬の胡耀邦・中国共産党書記の来日さひかえて、「この二、三日中間関係は一段と太い絆で結ばれたかに一見思われよう。

だが、同じ関係協議の時期に李先念・国家主席は、日中経済協力のシンボル・宝山製鉄所の第二期工事にきわめて消極的な姿勢を示した。また石橋訪中に於ける日本社会党と中国共産党との会談に示されたように、中国共産党は依然としてダブル・スタンダードの対日戦略を有していることなどについては、わが国の側はあまり気づいていない。

一方、政・財・官界あけての昨今の中国傾斜やシルク・ロード物などへのロマンチックな憧憬にもかかわらず、最近の中国社会で断行されている見せしめ公開処刑の写真や一説には五千人にもほるといわれる最近の中国での犯罪者死刑執行の報など



東外大教授 中嶋 嶺雄

日中非友好の暗流に目を注げ

だが、わが国の多くのひとと、とくに若い世代に多大な心理的な反発をきたらしていることについては、中国当局はまったく気づいていないよう。

「赤い貴族」の独裁体制を固めつつある当国の鄧小平・胡耀邦体制下の中国は、この秋から始まる、鄧小平の最後の賭け、としての整党運動をまっぴらにして、さらに体制の引き締めを強化しなければならぬのかもしれないが、それについても先般の

逃れられぬか毛沢東の亡霊

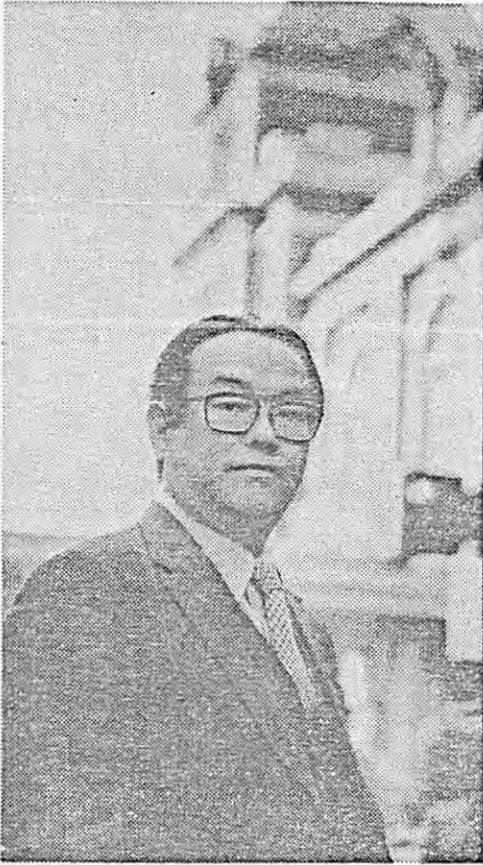
で、つい最近の映画『東京裁判』批判にいたる一連の『日本軍国主義』批判の潮流である。本紙の八月十五日付主張「なげいき東京裁判か」を批判した九月二十日付『人民日報』の「日本の公正な世論は軍国主義復活の暗流を批判している」と題する記事にも見られるように、中国側の批判はわが国における東京裁判についての「公正な世論」や真摯な論議をまったく無視した一方的なものだといえよう。

従って、中国の批判はきわめて恣意的であり、わが国自身はほとんど変化していかないのに、その日本が「友好国」になったり「軍国主義」になったりするものである。中国自身は日本からの円借款や経済協力によって、核ミサイルや原子力潜水艦なども保有する軍事大国への道を歩みつつあることについては、どう説明するのだろうか。

「北京周報」は早速、九月六日付の第三十六号で「荒唐無稽な『非毛化』」と題して反論を開始しているが、その立論は、きわめて一方的なものであった。しかし、この点は中国に深い理解を示してきたアメリカの著名なジャーナリスト、セオドア・H・ホワイトの「毛沢東の亡霊を追放」との表紙兩つきの記事を載せた『タイム』(九月二十六日号)が九月下旬に中国国内で発売禁止になったことにも関連しているように思われる。

『鄧小平文選』の大量刊行に次いで、この九月下旬には、鄧小平の健在ぶりを誇示する游泳写真が発表されたりすると『毛主席語録』や毛沢東長江遊泳写真発表の時期、つまり毛沢東体制の末期とつい比較してみたくもなる。

そのような雰囲気の中で、最近の中国の論調には、文革期ないしは毛沢東時代のような日中非友好の暗流が再び見えかかっていることを指摘しないわけにはゆかない。



かつて日米安保体制やわが国の自衛隊の存在に激しく反発していた中国が、日中友好時代の到来とともに、自己の対ソ戦略のためもあって、一転、日米安保を日本の防衛力増強を認める方向へと転じ、最近はその接近に見られる中国の対ソ戦略の転換とともに、また再び「日本軍国主義」批判のトーンを強めているのである。

一連の日本軍国主義批判

このように暗流は、大分すくなく二つの種類に分けられる。その一つは、昨夏の教科書問題以来のもの

かつて日米安保体制やわが国の自衛隊の存在に激しく反発していた中国が、日中友好時代の到来とともに、自己の対ソ戦略のためもあって、一転、日米安保を日本の防衛力増強を認める方向へと転じ、最近はその接近に見られる中国の対ソ戦略の転換とともに、また再び「日本軍国主義」批判のトーンを強めているのである。

いしは中国批判は許さないとしかたなく、時代錯誤的な姿勢の再現である。こうした論調は、中国の対外広報誌『北京周報』一九八三年第三十一号(八月二日)の特集「『北京周報』日本語版刊20周年を祝う」に出た張香山・中日友好協会副会長の「新たな飛躍の発展を望む」と題する文章以来、急速に目立ってきい

「北京周報」は早速、九月六日付の第三十六号で「荒唐無稽な『非毛化』」と題して反論を開始しているが、その立論は、きわめて一方的なものであった。しかし、この点は中国に深い理解を示してきたアメリカの著名なジャーナリスト、セオドア・H・ホワイトの「毛沢東の亡霊を追放」との表紙兩つきの記事を載せた『タイム』(九月二十六日号)が九月下旬に中国国内で発売禁止になったことにも関連しているように思われる。

も最近の中国は本当に毛沢東の亡霊に憑かれはじめているのかもしれない。